

参考資料

【吉田松陰略歴】

●天保元年8月4日(1830年9月20日)～安政6年10月27日(1859年11月21日))。長州藩士にして思想家、教育者、兵学者。明治維新の事実上の精神的理論者とされる。

●幼時の名字は杉。幼名は杉虎之助または杉大次郎。養子後の名字は吉田、通称は吉田寅次郎。号は松陰の他、二十一回猛士など。

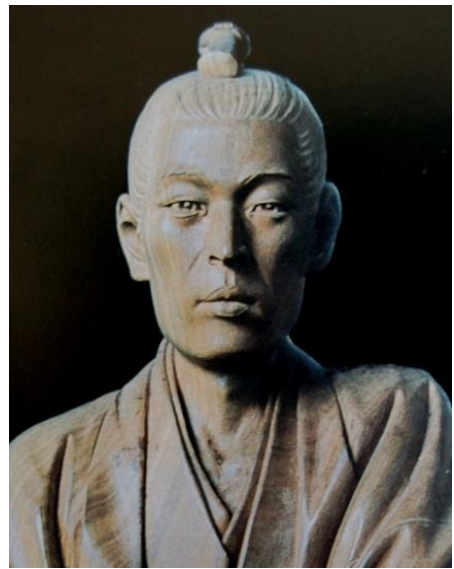
●文政13年(1830年)8月、長州藩の下級武士・杉百合之助の二男として萩の松本村に生まれる。

●嘉永7年(1854年)1月、ペリー2度目の来航の際、長州藩足輕・金子重之助とともに密航計画を企てるも失敗、萩の野山獄に幽囚される。

●安政2年(1855年)、生家で預かりの身となるが、安政4年(1857年)叔父の玉木文之進が開いていた私塾・松下村塾を引き受けて主宰者となり、高杉晋作を初め久坂玄瑞、伊藤博文、山県有朋、吉田稔麿、前原一誠など、維新の指導者となる人材を教え育てる。

●安政5年(1858年)、幕府が勅許なく日米修好通商条約を結ぶと松陰は激しくこれを非難、老中・間部詮勝の暗殺を企てた。長州藩は警戒して再び松陰を投獄。

●安政6年(1859年)、幕府の安政の大獄により長州藩に松陰の江戸送致を命令。松陰は老中暗殺計画を自供して自らの思想を語り、同年、江戸伝馬町の獄において斬首刑に処される、享年30(29歳没)。獄中にて遺書として門弟達に向けて「留魂録」を書き残す。



【松下村塾門下生について】

●萩城下の松本村(現在の萩市)に、松陰の叔父である玉木文之進が1842年(天保13年)に設立したのが松下村塾のはじまり。松陰は1855年(安政2年)に、実家である杉家に塾居する事になり、杉家の母屋を増築して、引き継ぐ形で松下村塾を主宰、武士や町民など身分の隔てなく塾生を受け入れた。

●松陰が塾生達の指導に当たったのは僅か2年余りにしかすぎなかったが、松陰の指導・薫陶を受けた松下村塾門下生達は尊王攘夷を掲げて京都で活動した者や、明治維新で新政府に関わる者など幕末・明治において大きな活躍を果たす。

●久坂玄瑞や高杉晋作、吉田稔麿など倒幕運動の中で重要な役割を果たしながらも、それ故に明治維新を前にして道半ばで斃れた者も多いが、生き残った者は、伊藤博文、山県有朋の内閣総理大臣を筆頭に、多数の国務大臣、大学の創業者など近代日本に繋がる大きな役割を果たした。塾生名簿は現存しないが、著名な門下生には久坂玄瑞、高杉晋作、吉田稔麿、入江九一、伊藤博文、山県有朋、前原一誠、品川弥二郎、山田顕義、野村靖、松浦松洞などがいる。

●「吉田松陰」と「松下村塾」の名は門下生達の活躍により、全国に轟き、現在まで語り継がれる歴史上稀に見る奇跡の私塾となったといっても過言ではない。



萩にある松下村塾(左、中央)と松下村塾門下生の写真(右)

【久坂 玄瑞(くさか げんずい)】

●天保11年(1840年)5月誕生日不明 - 元治元年7月19日(1864年8月20日)。字は「玄瑞」、通称は「義助」。

●長門国萩平安古(現・山口県萩市)に萩藩医 久坂良迪と富子の三男として誕生。

●安政3年(1856年)17歳の時、藩に願い出て九州に3ヶ月間遊学。松陰の親友であった宮部鼎蔵を訪ねた際、吉田松陰に学ぶことを奨められ、初めて生涯の師となる松陰の名を耳にする。

●帰藩後、松陰に手紙を書き、吉田松陰と書簡のやりとりを行い、その1年後、18歳となった玄瑞は松下村塾へ入塾し、松陰の薫陶を受けることとなる。松陰は久坂を「防長第一流の人物」とであると高く評価し、高杉晋作と争わせて才能を開花させるようつとめた。

●松陰は、自分の一番下の妹との結婚を玄瑞に勧め、安政4年12月、松陰の妹・文と結婚。時に玄瑞18歳、文15歳。

●安政5年(1858年)江戸と京都に遊学。安政の大獄による師・松陰刑死の後から、玄瑞は松陰の遺志を継ぐかのように長州藩尊攘運動の先頭に立ち活発に活動するようになる。

●長井雅楽の「航海遠略策」によって藩論が公武合体論に傾くと、文久2年(1862年)同志と共に上京し、長井の弾劾を叫び、藩論の転換に尽力した。

●1862年10月、高杉晋作らと攘夷血盟を行い、御楯組を結成。12月には品川御殿山に建設中の英国公使館焼き討ちを実行した。

●文久3年(1863年)1月27日に京都翠紅館にて各藩士と会合。4月からは京都藩邸御用掛として攘夷祈願の行幸を画策。同年5月には、下関にて光明寺党を結成。首領に中山忠光を迎えて外国艦船砲撃を実行する。

●入京し、尊攘激派と大和行幸の計画などを画策した。八月十八日の政変によって長州勢が朝廷より一掃された後も、しばらくの間京都詰の政務座役として在京し、長州藩の失地回復を図った。

●元治元年(1864年)6月池田屋事件の報が国許に伝わると藩内で京都進発の論議が沸騰。来島又兵衛や真木和泉らが諸隊を率いて東上。真木和泉らと共に堺町御門で戦ったが(禁門の変または蛤御門の変)で自刃した。享年25。

●松陰から受け継いだ久坂玄瑞の思想と行動力は、坂本龍馬や中岡慎太郎をはじめ、多数の志士たちに大きな影響を与えた。西郷隆盛は、明治維新の後、久坂玄瑞について以下のようなことを述べている。「今、俺が少しばかりの手柄があったからといって皆にチヤホヤされるのは、額に汗が出るような気がする。もし藤田東湖先生や、久坂玄瑞、その他の諸先輩が生きておられたなら、とうてい、その末席にも出られたものではない。それを、ああいう先輩方が早く死なれたために、俺のような者が偉そうに言われるのは、恥ずかしゅうてならぬ」(頭山満「大西郷遺訓」)。



萩にある久坂玄瑞の

【高杉 晋作(たかすぎ しんさく)】

- 天保10年8月20日(1839年9月27日) - 慶応3年4月14日(1867年5月17日)諱(本名)は春風。号は東行。
- 長門国萩城下菊屋横丁(現・山口県萩市)に長州藩士 高杉小忠太・みちの長男としてうまれる。高杉家は戦国時代毛利家中興の祖・毛利元就からの家臣であり、代々毛利家に仕えてきた名門。父、祖父は藩の重要な仕事に就いてきたこともあり、高杉家の武士としての誇りを持って育っていった。
- 嘉永5年(1852年)藩校の明倫館に入学、安政4年(1857年)に久坂玄瑞の誘いで吉田松陰が主宰していた「松下村塾」に入り、生涯の師・松陰と出会う。
- ペリー来航時に黒船の艦隊に乗り込み密航を企てるなど国禁を犯していた松陰を晋作の家族は快く思っていなかったが、単なる知識ではなく、物事を実践する知識として教えていく松陰に晋作は引き込まれていった。松陰の下で一心不乱に勉学を始め、「人物・高杉晋作」が形成されていった。

●ある時、晋作は江戸の伝馬牢に囚われている松陰に手紙を出し、「男子たる者の死」について質問している。それに対し松陰は書簡でこう返答した。

【吉田松陰の高杉晋作宛書簡】

安政六年七月中旬 松陰江戸獄 高杉江戸。



死は好むべきものにあらず、亦悪むべきにもあらず。
道尽き安ずる、便ち是死所。
世に生きて心死する者あり。身亡びて魂存する者あり。
心死すれば生くるも益なし。魂存すれば亡ぶも損なきなり。
死して不朽の見込みあらばいつでも死すべし。
生きて大業の見込みあらばいつでも生くべし。

(死は、好むべきでも憎むべきものでもない。人としての道を尽くしたならば自然と心も落ち着いてくる。この時が死ぬ時である。また、世の中には、身は生きていても心が死んでいる人があり、身は亡んでいても魂が生きている人がある。心が死んでいれば生きていても益はなく、逆に魂があれば亡んでも損はない。死んで名声が永久に亡びないのであれば、いつ死んでも良い。また、生きて大業を成す見込みがあれば、いつまでも生きるべきである)

松陰が晋作に送った死生観に関するこの手紙が、後の晋作の生き方に大きな影響を及ぼしたことは想像に難くない。

- 安政6年(1859年)松陰が刑死した後、手紙で「松陰先生の仇は必ず取ります」と激しい怒りを書き記している。
- 文久2年(1862年)藩命で、幕府使節随行員として長崎から中国の上海へ渡航、清が欧米の植民地となりつつある実情を見聞して帰国。
- 文久2年(1862年)同志とともに品川御殿山に建設中のイギリス公使館焼き討ちを実行。行動の過激の度合いを強めていく。
- 文久3年(1863年)身分に因らない画期的な軍隊・奇兵隊を結成し、奇兵隊開闢(初代)総督となる。
- 文久4年1864年8月、イギリス、フランス、アメリカ、オランダの4カ国連合艦隊が下関を砲撃、砲台占拠を行い、晋作が和議交渉全権を担う。
- 文久4年(1864年)12月、幕府による第一次長州征伐が迫る中、長州藩では俗論派(佐幕派)が台頭する中、伊藤俊輔(伊藤博文)率いる力士隊ら長州藩諸隊を率いて拳兵(功山寺拳兵)。後に奇兵隊ら諸隊も加わり、俗論派の首魁・椋梨藤太らを排斥して藩論を倒幕に統一することに成功する。
- 慶応2年(1866年)第二次長州征伐(四境戦争)では海軍総督として、幕府艦隊を退け周防大島を奪還に成功。同年7月、将軍徳川家茂の死去の報を受けた幕府軍総督小笠原長行は戦線を離脱。事実上幕府軍の敗北に終わり、幕府の権威は大きく失墜し、1867年11月の大政奉還へと導かれる事となる。
- 慶応3年(1867年)4月14日深夜に死去。大政奉還を見ずしてこの世を去ることとなる(享年27)。松陰の教えを実行し、時代を駆け抜けた太く短い一生だった。

【高杉晋作辞世の句(といわれているもの)】

おもしろき こともなき世に おもしろく

下の句を看病していた野村望東尼(勤皇の歌人)が「すみなすものは心なりけり」とつけたと言われている。

【高杉晋作顕彰碑文】

動けば雷電の如く発すれば風雨の如し、衆目駭然、敢て正視する者なし。これ我が東行高杉君に非ずや…

(一たび動けば雷電のごとく、発すれば風雨のごとし。周りの者は、ただただ驚き、呆然とするばかりで、敢えて正視する者すらいない。それこそ我が高杉さんのことだ)後年、伊藤博文が高杉晋作顕彰碑に記した言葉。

【伊藤 博文(いとう ひろぶみ)】

●天保12年(1841)周防国熊毛郡東荷村(現在の山口県大和町)に父・十蔵、母・琴子の長男生まれた。幼名は利助(後に利輔)次に春輔(又は俊介、俊輔)と称せられ、後に博文と改名した。

●嘉永2年(1849)9歳の時に萩に移り、安政4年17歳の時に松下村塾に入門。吉田松陰は「中々周旋家になりそうな」と後の伊藤博文を評した。

●その後、松下村塾で出会った木戸孝允、高杉晋作、久坂玄瑞らと交わり、文久2年(1862)には久坂とともに公武合体論を主張する長井雅楽の暗殺を画策、品川御殿山のイギリス公使館を焼き討ち、するなど尊皇攘夷の志士として活躍した。

●文久3年(1863年)自ら志願して井上聞多、遠藤謹助、山尾庸三、野村弥吉ら所謂「長州五傑(長州ファイブ)」と共にロンドンに留学。西洋列強の実力を体感し、開国・富国強兵論に転じ、武力倒幕運動に積極的に参加した。

●翌元治元年(1864年)、長州藩による下関での外国船砲撃事件を知ると、井上聞多とともに急ぎ帰国し戦闘回避に奔走するがかなわず、戦後の和平交渉の際は通訳として使節に参加。

●長州藩が第一次長州征伐(幕長戦争)で幕府に恭順の姿勢を見せると、高杉晋作に従い「力士隊」を率いて拳兵。後に「奇兵隊」も加わるなど各所で勢力を増やして俗論派を倒し、藩論を倒幕にすることに成功。統一正義派(革新派)に藩政を握らせることになる。

●明治維新後は元年に兵庫県知事となり、その後は新政府の中枢で活躍。明治18年(1885)に初代内閣総理大臣となり、以後、第5代・第7代・第10代と4次にわたり内閣総理大臣として内閣を組閣した。

その間、大日本帝国憲法制定の起草・主導的役割を果たし、初代枢密院議長・韓国統監府統監・貴族院議長など数々の要職を歴任。立憲政友会を結成し初代総裁を務めるなどもしている。

●明治42年10月26日、極東問題で赴いた満州ハルビン駅にて安重根に暗殺された。(享年69歳)



東京にある伊藤博文の墓。

【山縣 有朋(やまがた ありとも)】

●天保9年(1838)に長州藩の蔵元附中間(ちゅうげん:足軽より低い身分)・山県三郎有稔の二男として生まれる(幼名・辰之助)。

●尊皇攘夷派の影響を受け、久坂玄端の紹介で松下村塾に入門、生涯師と仰ぎ続けた吉田松陰と出会う(山県の松下村塾在塾期間は極めて短かったが、松陰に多大な影響を受け、終生深く畏敬していた。また、生涯「自分は松陰先生門下である」と称し誇りにしていた)。

●文久3年(1863年)に、上海に渡航した高杉晋作に代わって奇兵隊軍監として大いに活躍。元治元年(1864年)の四国連合艦隊との交戦で負傷した際、武器と兵制の改革の必要性を痛感し、尊王攘夷論から開国論に転じた。

●慶応元年(1865年)、長州藩の俗論派(佐幕派)と正義派(倒幕派)が激突した大田・絵堂の戦いでは、正義派に奇兵隊軍艦として参戦。長州藩藩論を倒幕へと決定づけたこの戦いの勝利に貢献した。

●明治元年の戊辰戦争には、奇兵隊を率いて北陸道鎮撫総督兼会津征討総督の参謀として、長岡攻略戦に河井継之助らと戦う(苦戦)、後に会津攻略にも参加。

●明治2年(1869年)渡欧し、各国の軍事制度を視察し、翌年帰国した後は暗殺された大村益次郎の遺志を継いで軍制改革を行い、徴兵制を取り入れた。明治6年(1873年)に陸軍卿となり、参謀本部の設置、軍人勅諭の制定に深く関わる。(良くも悪くも日本陸軍の実質的な建設者が山県有朋であるといえる)

●明治22年(1889年)に第9代内閣総理大臣に就任。軍備拡張を進める。明治31年(1898年)、第2次山縣内閣発足。参謀総長、枢密院議長なども務めている。

●伊藤博文なきあと最大の発言力をもつ元老として、軍や政界に重きをなし、首相選定の主導権を握る。晩年は陸軍のみならず政界の黒幕として君臨し、「日本軍閥の祖」の異名をとった。

●当時の国民、政治家、皇室からはことごとく不人気であったが、昭和天皇は軍人・山県有朋を評価している。大正11年、85歳で亡くなった。



東京・護国寺にある
山縣有朋(左)と妻・
友子(右)の墓。

【山田 顕義(やまだ あきよし)】

- 弘化元年(1844)に萩藩士・山田七兵衛の長男として生まれる。
- 藩校明倫館に学んだ後、安政5年15歳の時に松下村塾に入門、吉田松陰に師事する。
- 文久2年12月、高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤俊輔、品川弥二郎らとともに攘夷の血判書(御楯組血判書)に名を連ねる。その後、長州藩の内乱に参戦するなど倒幕の志士として数々の戦いに参加。
- 元治元年、蛤御門の変(禁門の変)に参陣。山崎に布陣する久坂玄瑞、真木和泉らの陣に加わり参戦。
- 同年8月、品川弥二郎らと御楯隊を創設し、軍監となり、四カ国連合艦隊の下関攻撃(馬関戦争)で奮戦する(長州藩敗北)。
- 同年12月、対幕恭順論の「俗論派」による藩支配に対する高杉晋作の奇兵隊による決起(功山寺挙兵)に参戦し勝利を収め、藩内の「俗論派(佐幕派)」を排除し藩論を倒幕に統一する。
- 慶応4年1月には「鳥羽・伏見の戦い」、「戊辰戦争」に加わり、「箱館戦争」時には陸軍参謀兼海陸軍参謀として、官軍を勝利に導いた。
- 維新後、明治7年に江藤進平らが起こした「佐賀の乱」、明治10年に西郷隆盛らが起こした「西南の役」に征討軍の将として参加し、いずれも鎮圧。その戦術は「用兵の妙、神の如し」と評された。
- 明治新政府では、東京鎮台司令長官、司法大輔、陸軍中将、参議、工部・内務・司法の各卿などを歴任。明治18年、初代の司法大臣として入閣し、法典編纂に貢献し、法典伯と称される。明治24年、病気のため辞職するまで、伊藤、黒田、山県、松方の四代の内閣で司法大臣を務める。
- 教育を重視し、明治22年日本大学の前身である日本法律学校を創設し、次いで翌年、國學院(現在の國學院大学)を設立、その後公私法律学校を育成した。
- 明治25年帰郷途中、生野銀山で急逝。享年49歳。



建学の祖として日本大学法学部本館の前に
建てられている山田顕義の胸像。

東京・護国寺にある
山田顕義の墓。

【木戸 孝允(きど たかよし)・志士時代は桂小五郎(かつらごろう)】

●天保4年(1833年)、現在の山口県萩市に萩藩医・和田昌景の長男として生まれる。七歳で向かいの桂家の末期養子となり(養父:桂九郎兵衛)、長州藩の大組士という武士の身分と秩禄を得る。

●10代に入ってから、藩主毛利敬親による親試で褒賞を受け、**長州藩の若き俊英**として注目され始める。

●嘉永2年(1849年)、藩校明倫館で山鹿流兵学教授であった吉田松陰に兵学を学び、「事をなすの才あり」と評される。桂小五郎はいわゆる私塾・松下村塾の門下生ではなかったが、その後も松陰に対し、門人の礼をとり続けていた。

●嘉永5年(1852年)、剣術修行を名目とする江戸留学を藩に許可され、江戸に旅立つ。江戸では江戸三大道場の一つ、「力の斎藤」の練兵館(斎藤弥九郎)に入門し、神道無念流剣術の免許皆伝を得て、入門一年で練兵館塾頭となる。藩命で帰国するまで5年間、**練兵館の塾頭を務め、その間、剣豪の名を天下に轟かせた**。江戸で多くの志士たちと交流しながら、**長州藩の尊攘派のリーダーへと成長**。

●文久3年(1863年)5月、藩命により江戸から京都に上る。京都で久坂玄瑞たちとともに破約攘夷活動を行い、正藩合一による大政奉還および新国家建設を目指す。長州藩は京において中央政界を牛耳る存在となっていたが、文久3年「八月十八日の政変」で京都から追放の憂き目に遭う。翌年、小五郎は再上洛し潜伏しつつも藩の失地回復に勤めた。

●有名な池田屋事件では池田屋へ一番早く行ったが、まだ同志が集まっていなかった為、近くの対馬藩邸へ行っていたため、小五郎は運良く難を逃れた。(新選組が池田屋を襲撃したのは、小五郎が対馬藩邸に行っている間に起こった)

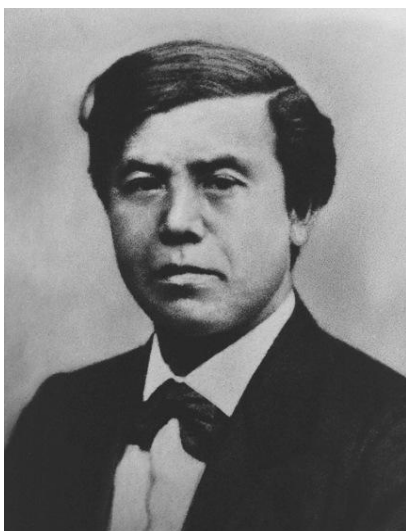
●池田屋事件は、八月十八日の政変以来、挙兵を訴えていた長州藩の急進派を刺激する結果となり、禁門の変における武力上洛を引き起こしたが、惨敗。小五郎はその後も京に潜伏し情報収集に努めるが、同志からの依頼で帰郷する。

●その後、坂本龍馬の斡旋で薩長同盟を締結。翌年の第二次征長戦にて幕府軍を退け、大政奉還を経て後、長州藩の復権に成功。**薩長主導による武力倒幕を成し遂げ、新政府を樹立する**。

●新政府では総裁局顧問、外国事務係、参与となり、「五箇条の御誓文」の起草に参画し、大久保らとともに**版籍奉還の実現に尽力する**。明治4年(1871)、西郷とともに参議となる。**廃藩置県を断行**。

●明治4年(1871年)、岩倉使節団の副使として欧米に歴訪するなどするが、その後は、大久保による独裁体制の政局に不満を抱き、次第に政府中枢から遠ざかっていくようになる。長年の心労で心の病を患っていたようである。

●明治10年、西南戦争の最中、病没。享年45歳。



松下村塾の主な門下生(順不同)	
久坂玄瑞 くさかげんすい	松下村塾の双璧。松陰から「年少防長第一流の人物たり。因って亦、天下の英才たり」と高く評価された英才。長州藩における尊王攘夷派の中心人物として活躍した。坂本龍馬や中岡慎太郎、西郷隆盛など幕末の志士達に多大な影響を与えた。禁門の変で自刃(享年25)。
高杉晋作 たかすぎしんさく	松下村塾の双璧。功山寺拳兵により長州藩の藩論を倒幕に統一。その後の第二次長州征伐(四境戦争)でも海軍総督を務め、江戸幕府のを倒壊を決定づけた。結核により明治維新を見ずに逝去(享年27)。
吉田稔麿 よしただししまろ	松下村塾の三秀(久坂、高杉、吉田)。松陰主宰初期の松下村塾門下生として、増野徳民、松浦松洞と共に「三無生」とも言われる。松陰から「陰謀にして皆人の駕馭を受けざる高等の人物なり」と高く評価された。奇兵隊に参加後、尾勇隊を創設するなど、松陰死後に有力な志士として活動したが、池田屋事件で討ち死(享年24)。
入江九一 いりえくいち	松下村塾の四天王(久坂、高杉、吉田、入江)。久坂、高杉などの門下生の大半が反対する中、松陰が考えた老中・間部詮勝要撃計画に加わるなど、最後まで師に追従。高杉の奇兵隊創設にも協力した。禁門の変で自刃(享年28)。
伊藤博文 いとうひろぶみ	高杉の功山寺拳兵に力士隊を率いて参加。明治維新後は兵庫県知事の後、初代内閣総理大臣となり、以後、第5代・第7代・第10代と4次にわたり内閣総理大臣として内閣を組閣。長きにわたり、国政の発展に貢献した。明治42年、満州にて安重根に暗殺された(享年69)。
山縣有朋 やまがたありとも	奇兵隊軍監として活躍。明治維新後は、明治22年に第9代内閣総理大臣に就任。明治31年にも第2次山縣内閣を発足させた。山県の松下村塾在塾期間は極めて短かったが、松陰に多大な影響を受け、終生深く畏敬していた(享年85)。
前原一誠 まえばらいっせい	長州藩における倒幕活動に尽力。戊辰戦争では参謀として活躍した。維新後は越後府判事や参議を勤める。明治9年、不平士族を集め「萩の乱」を起こし、処刑された(享年43)。
品川弥二郎 しながわやじろう	松陰死後、尊王攘夷活動に奔走。山田顕義らとともに御楯隊を組織するなどした。戊辰戦争では奥羽鎮撫総督参謀、整武隊参謀として活躍。維新後は、第一次松方内閣で内務大臣をつとめた。民間にあっては、現在の獨協学園(獨協大学)や京華学園(京華中学・高校)を創立した(享年58)。
山田顕義 やまだあきよし	禁門の変や、功山寺拳兵、戊辰戦争に参戦。明治7年「佐賀の乱」、明治10年「西南の役」では征討軍の将として戦った。明治新政府では、明治18年、初代司法大臣として入閣。以後四代の内閣で司法大臣を務めた。また、日本大学の前身である日本法律学校を創設し、次いで翌年、國學院(現在の國學院大学)を設立した(享年49)。
野村靖 のむらやすし	入江九一の弟。兄とともに老中・間部詮勝要撃計画に加わるなど、最後まで師に追従した。維新後は神奈川県令、枢密顧問官、駐仏公使などを歴任。第2次伊藤内閣の内務大臣、第2松方内閣の逓信大臣にも就任している。現存する「留魂録」を、松陰の死から17年後、元牢名主であった沼崎吉五郎から受け取った人物(享年68)。
正木退蔵 まさきたいそう	現在の東京工業大学の初代校長や、ハワイ総領事を務めた。正木は明治4年、ロンドン大学で化学を学ぶため渡英し、帰国後、再度渡英しているが、このとき「宝島」で知られる世界の文豪R.H.ステュープスンに、師である松陰の思い出を語って聞かされた。正木から聞いた松陰の生き方に心を動かされたステュープスンは、世界初の松陰の伝記「YOSHIDA-TORAJIRO(ヨシダトラジロウ)」を著している。(享年51)
松浦松洞 まつうらしやうどう	松陰主宰初期の松下村塾門下生で「三無生」の一人。現存する江戸におくられる直前の吉田松陰の肖像を描き残した人物として知られる。公武合体論を唱える長井雅楽の暗殺を企てるが果たせず、京都で自害(享年26)。
増野徳民 ましのとくみん	松陰主宰初期の松下村塾門下生で「三無生」の一人。文久2年に久坂玄瑞らによる長井雅楽暗殺計画に加わろうとして失敗。これ以後は、故郷で医業に専念した。慶応2年の四境戦争の際には芸州口へ軍医として赴いている(享年37)。
(木戸孝允) きとたかよし	志士時代(桂小五郎)は長州藩尊王攘夷派の中心人物として活動。新政府では参与となり、「五箇条の御誓文」の起草に参画、版籍奉還の実現にも尽力した。西郷隆盛、大久保利通とともに、「維新の三傑」と呼ばれる。長州藩の藩校・明倫館で兵学教授であった松陰に学び、「事をなすの才あり」と評される。木戸孝允は、いわゆる私塾・松下村塾の門下生ではなかったが、その後も松陰に対し、門人の礼をとり続けていた(享年44)。